

美という名のエネルギー

vol.4

栗原直弘

(古美術商)

第二章「美」の認識と発生 ①

「美術」と「芸術」

前回までの第一章を読まれた方から、「美術」と「芸術」の違いについてご質問があり、今回は先ずこの「言葉」についてお話ししたいと思います。以降は私見であり、諸先輩方にはご異論があるかもしれませんが、この論考ではこのように考えます。

「美術」とは、「相應の技術を持った人が、他者のために心地良い物、美しい物を造ろう」という意識によって成されたエネルギー「体」であると考えます。例えば、一部の書画を除いた、明治以前の日本画や漆芸などのように、「美」の追及によって成された物だと理解しています。

また「芸術」とは、音楽や舞踏なども含め、人にとって心地よい物、美しい物とは限らず、「自らの感情や情念、意識や思想をそれ

ぞれの手法で表現したエネルギー体」だと考えています。例えば、パブロ・ピカソのゲルニカのように戦争の愚かさや人間の多面性を自らの意識と技法を以って顕した作品など、それ自体は「美」を表現したのではなく、制作意図の理解や第三者の解釈が必要になります。

「普段着」と「よそ行き」

そもそも、明治の開国まで日本には「美術」という言葉はなく、「芸術」という言葉も違う意味で使われていました。それらは、欧米の概念を日本語にする段階で生まれた新しい言葉で、それまでの日本には無い観念でした。

本来、日本における「美」とは、信仰に

根差した祭器や法具、日常の調度や装飾品など、実用品の延長線上に存在するものでした。ただ、昔から日本には「普段着とよそ行き」という文化があり、たとえ同じ機能や用途であっても使用する場所や状況によって「質」や「格」に違いがあり、例えば同じ「硯箱」でも、普段使いの物と晴れの席や床の間などに飾る物、また、贈答用や献上用などを、それぞれに使い分けてきたのです。

それらの違いは、それぞれの「出来」や「価格」ばかりでなく、注文や制作における施主の「思い入れ」や造り手の「緊張感」など、そこに込められたエネルギーの違いであり、それが「美」の違いとなって顕れているのです。そして、このような違いや

在り方が日本古来の「美」の格付けであり、明治以前の日本には「美術品」や「芸術品」という意識や区別はありませんでした。

金銭的な価値

先に産業革命を成し遂げたヨーロッパでは、古美術や美術品などの新しい需要に対して、それらの市場価値を構築するため、いわゆるオーソリティーと呼ばれる権威を作り、美術品や古美術を金融商品として流通させるためのサロンやオークションを作ります。そして、このような意識とシステムが明治の開国とともに日本にも持ち込まれ、それまでの日本の「美」の在り方や日本人の価値観を変えてきたのです。戦後の経済成長を経て、金銭的な価値によ

る美術品や古美術のランク付けは一段と進み、近年ではそれぞれの「美」の評価よりも、その価格による評価が先行することによって「美」そのものの理解と評価が疎かになっていくとさえ感じています。

確かに、資本主義というシステムの中では、市場価値の無いものは無用の長物であり、マスコミなどを使って市場価値を捏造することも可能ですが、市場価値の高いものが良い美術品であるかのような価値観は、正に「美」や「文化」の末路でしょう。そして、このような金銭的価値観から離れ、「美」そのものの意味や価値を探ろうとするのが、この「美」という名のエネルギーという論考なのです。

言葉の混乱と誤用

十九世紀末の博覧会の時代に欧米から喝采をもって向えられた日本の絵画や工芸も、二十世紀に入ると、一部の権威によって「粉本（伝統的な手本）」を元にして工房で制作された「装飾美術」であるとされ、人間の内面性を表現した作品の方がより芸術性が高いとして、その後の日本美術の在り方にも大きな影響を与えました。しかし私は、このような日本美術の評価は、当時の欧米の一部の人々による表面的な理解だと考えています。

日本における「美」の在り方は、作品に直接「自我」を投影するのではなく、工房などでの修行によって技術を極め、自らと

向き合うことで至高の「美」に達しようとするものであり、また、工房が子弟の教育機関であったことをも含め、近年になって日本の伝統的な在り方が再評価されています。

鹿鳴館時代から続く西洋崇拜、「美術」や「芸術」などの言葉の誤解、また「絵画」だけを純粹芸術としたことで、未だに「工芸」を一段低く見る風潮があり、自国の「美」やその在り方の研究と評価が遅れました。さらに、自らが生まれた国の歴史や文化、伝統や美術などの教育のお粗末さに加え、市場における「アンティーク」や「オリジナル」などといった言葉の誤用と乱用によって、日本人の「美」の価値観は迷走してきたのです。

(次号へ)